ルのレジデント・カンパニーとして活動しているため、上記の施設側のボランティアと明確な区分をすることは難しいのが実状だろう。

② 芸術フェスティバルのボランティア

米国では、特に夏季に各地で様々な芸術フェスティバルが開催されているが、そこでは、たいていの場合多数のボランティアが活躍している。業務の内容はチケットの予約受付や販売係り、会場整理、もぎり・客席案内、ショップでの販売員など幅広い分野にわたっている。

フェスティバルの場合は、短期間に大量の業務が集中するため、恒常的な組織体制では対応しきれないことが、多数のボランティアを導入する理由のひとつになっている。フェスティバルにおけるボランティアはわが国でも採用する例が増えているが、例えば「タングルウッド・フェスティバル」や「サラトガ・パフォーミング・アーツ・フェスティバル」など、規模の大きいところでは、数百名から1,000人近いボランティアが活躍している。ボランティアのマネジメント自体もボランティアの自治によって行われているケースが多い。

③ その他パフォーミング・アーツに関連したボランティア

米国では、リタイアした普通の人をボランティアとして集め、彼らに朗読をしてもらったり昔話しをしてもらったり、そういう人たちをまとめてトレーニングをして即興舞台にして、それを地域の小学校とか老人ホームとかで演じて地域内をツアーしてまわるといったような活動を行っている非営利団体も見られる。

こうした例は、劇場やホールなどの文化施設、あるいは劇団やオーケストラなどの芸術団体、芸術フェスティバルといった具体的な催しとは直接的な関係がなく、すなわちボランティアが支援する対象がない形ではあるが、パフォーミング・アーツ分野のボランティアとして興味深い活動といえる。

また、米国の文化施設では、インターン制度を採用しているところが多い。インターンは、将来芸術の分野での仕事をしようとする学生が、一定期間劇場やホール、美術館等で研修を行うもので、大学や大学院のアート・アドミニストレーション・コースでも、カリキュラムの一部に組み込まれている。これは、ボランティアというより、専門的な人材の育成といった観点から捉えられるべきだと思われるが、無償かつ何等かの形で文化施設の運営をサポートしているという点では、ボランティアに通じる要素を持っている。

④ 調査対象事例

こうしたことから、今回の調査では、次の6ヶ所の文化施設、団体、機関を選出し、インタビュー調査を実施した*[2]。

- **The Symphony Space（シンフォニー・スペース）**：廃屋の映画館を地域住民が

*[2] それぞれの施設の概要やボランティア制度の内容は、巻末の調査事例資料に整理した。